

# 《翻刻》『画口合相撲 地巻』（その三・全三回）

中 島 穂 高

本誌一〇九号・一一一号に引き続き、『画口合相撲 地巻』の「四日目」・「五日目」の翻刻を掲載する。解題・書誌・凡例については前々号を参照いただきたい。

## 四日目（四十八才）

四日目初

南に高く巻登り

スカ丸

東 琵琶彈語る詫の軒 蟬丸

里丸

西 鬻ウツに雅なる茶事チャ凝 賣茶／翁（四十八ウ）

東 蟬丸の藁家の琴調ひ候／西 賣茶翁も能言なし給へり双方とも手垂／なる中に西巻登り茶事を凝すこし／かけ合薄きやうなり依て東を勝とす

（軍配印）東 百五点

西 八十点（四十九才）

四日目二

南に高く巻登り

梅里

東 自在に上る鞠を凝 大納言／成道

茂寿

西 風雅に盛る萩と萩 准句（四十九ウ）

東 大納言成道卿の鞠調ひ候／西 萩と萩の盛りも風流に言なし給ひ／是また調ひ候東は南に自在に少し薄き／やうなれども鞠を凝の詞よく入西は風雅との詞／よく入たれども萩と萩少し薄しされば双方互角／にて勝負分がたければ引分候

東 三十五点

西 三十五点（五十才）

## 四日目三

南に高く巻登り

出多成

東 寺内に雅なる萩こぞり 高臺／寺

スカ丸

西 風流に名立萩の野路 玉川（五十ウ）

東高臺寺の萩大体調へども萩こぞり／との詞思はしからず<sup>コソ</sup>挙るは  
人の上につかふ詞にて／萩多くとも<sup>コソ</sup>挙るとはいふへからず又見物  
に<sup>コソ</sup>挙り／たる義と聞ば其断立<sup>コトハリ</sup>ず大ニ残念／西玉川の萩調ひて申む  
ねなければ西勝

東 二十点

(軍配印) 西 四十点 (五十一才)

四日目四

南に高く巻登

里丸

東 希代に廻る蟻通し 准句

玉光

西 祝ひに赤く佳義の年 本卦／祝 (五十一ウ)

東 蟻通し大体調へども高くと廻る少し／甲斐なき所ありて残念／  
西本卦祝の赤衣装題によく入候此方／申むねなければ西勝

東 三十五点

(軍配印) 西 四十点 (五十二才)

四日目五

とふもならぬに

梅干

東 碁も名たつ智 吉備公

はしハ王子の家遠く

甲乙

西 針は謀士の智恵道具 太公望 (五十二ウ)

東 短句題吉備公の碁はさる更なから／碁を<sup>ゴ</sup>こつと引音なしたれば  
口合ニ文字たらず／西太公望が直なる針は王者を釣<sup>ヒクツ</sup>ん為なるを／

もつて智恵道具との詞を案<sup>ア</sup>じ出し給ひしハ／おもしろく一句調ひ  
て勿論西勝

東 二十点

(軍配印) 西 百十点 (五十三才)

四日目六

はしハ王子の家遠く

商人

東 萩は勝地の宜賞す 高臺寺

花の面影いつしかに

我丈

西 山の木の間で火串焚<sup>(ヒクシタギ)</sup> 准句 (五十三ウ)

東 高臺寺の萩調ひ候／西夏山<sup>ナツ</sup>の獵師<sup>カリウ</sup>の照射<sup>トモシ</sup>も同断尤火串と／いふ  
が訓くせなれどはひふへは相通なれば火串と／いふも難には有べ  
からず東西調ひし中に句は／西風情ありよつて西を勝とす

東 四十点

(軍配印) 西 七十点 (五十四才)

四日目七

はしハ王子の家遠く

登龍

東 溪間謀士の智て通る 韓信

恋の友とち打寝もやらて

閉口

西 世にそ蘿き釣堀の構<sup>(カマ)</sup> 楠 (五十四ウ)

東 韓信蜀の陳倉道より入て道ををしへし／樵夫<sup>キコリ</sup>を殺せし義調ひ  
候／西楠の釣堀の謀も巧に言なし給へりしかし／恋の<sup>ト</sup>世にぞ聊

ながらかけ合薄く打寝もやらでト／釣堀の構も同じく薄し依て東勝

(軍配印) 東 七十点

西 四十点 (五十五才)

四日目八

橘は王子の家遠く

屯

東 神は皇位の伊勢両宮 門外／客

こよしかる物うたひしか

梅里

西 高威増こそ馬に鹿 趙高 (五十五ウ)

東伊勢の両宮皇位との詞御尤にて調ひ候／西趙高が馬鹿の故吏も大体調へども／こよしかるものト高威増こそすこしかけ合／慥ならず東勝と申べし

(軍配印) 東 四十点

西 三十点 (五十六才)

四日目九

旅たつ駒の鈴の音

茂久

東 交る小田の鶴の友 准句

かゝる姿を水茎に

西 盛る深山ぞ美しき よし／野山 (五十六ウ)

東小田のツル鶴調ひ候／西よし野山の花盛も大体調ひしやう／なれども姿をト深山ぞかけ合がたし／外三何とか言やう有べし東申むねなければ／勝とす

(軍配印) 東 四十点

西 三十点 (五十七才)

四日目十

のこるらのほる

梅干

東 踊る晩こそる 盆／おとり

類ひ嵐の風たにも

梅里「抹消「我」」

西 祭も囃しの鐘太鼓 地車 (五十七ウ)

東何とやら言残したるやうな題ながら句は／本文のかけ合よし然れども蜻蛉の尾を切し／やうなるは題のあしき故なるべし／西祭の地車類ひも祭も少し薄きやう／なれとも先調ひしと申べし西勝

東 二十点

(軍配印) 西 三十五点 (五十八才)

四日目十壹

結ふ契は利生のあらは

閉口

東 涼む往来は四条の川原 准句

はしハ王子の家遠く

屯

西 旅は陽氣の伊勢道中 全 (五十八ウ)

東は四条の涼ミ西は伊勢参宮いづれも陽氣／なる組合にて俱に句造も調ひ東は涼ミ行の／弁當引提て出さんとて西は参宮の一文宇笠／被き投にせんとす宮川の比丘尼か嶋さんほらんせ／投さんせ

との助言もおかしく互におとらす揉合うち／東は契は往来ハ少  
し甲斐なく茶店の床机の／あしいぶつきて西方勝

東 四十点

(軍配印) 西 四十五点 (五十九才)

四日目十二

川にまた、く早小船

梅里

東 怪し正なく仇の夢 蘆生

哥仙

西 わらひ名高く唐の連 三笑 (五十九ウ)

東 邯鄲の夢はさる支ながら川にあやし／かけ合がたし／西 虎溪  
の三笑も早小船 唐の連すこし／薄きやうなれど東ほどに聞えざ  
るにはあらず依て／西を勝とす

東 三十点

(軍配印) 西 三十五点 (六十才)

四日目十三

川にまた、く早小船

哥仙

東 花に名たゝる和歌を附 宗任

登龍

西 和哥に名か立はなの梅 鶯／宿梅 (六十ウ)

東 安部宗任が梅の哥大体聞ゆながら花と／斗にては梅槌ならず桜  
にも混ずべし且又／早小船 和歌を付かけ合も薄し／西 貫之が娘  
の鶯宿梅調ひ候此句は「見せケチ」も「いはゞ／絵の動く難な

きにあらねどさのミは申がたし／西勝

東 三十点

(軍配印) 西 四十点 (六十一才)

四日目十四

川にまた、く早小船

出多成

東 唐に名たゝる鷹の筆 徽宗／皇帝 閉口

西 曲り玉なる穴をぬけ 蟻／通し (六十一ウ)

東 徽宗皇帝の鷹の絵調ひ候／西 蟻通しも大体調へども早小船 穴  
を／抜何とやらかけ合工合よろしからず依て／東を勝とす

(軍配印) 東 八十五点

西 三十五点 (六十二才)

(六十二ウ空白)

五日目 (六十三才)

五日目初

川にまた、く早小船

屯

東 嵯峨に名たゝる尼の連 三人尼

ならひといは憂か又

梅干

西 名立の嶺が雪なかば 不二 (六十三ウ)

東 嵯峨の三人尼調ひ候／西 不二の雪も聞ゆながら憂が又 雪半  
かけ合しやうにて今少し槌ならず／東勝たるべし

(軍配印) 東 四十点

五日目二

人を初瀬の山の井に

閉口

東 徽宗かく絵も鷹の奇支 白斑の／鷹

川にまた、く早小船

哥仙

西 はだ身放さす業の笛 敦盛 (六十四ウ)

東 徽宗皇帝の鷹の絵の飛出し義を／趣向に取給ひ鷹の奇支との詞  
無理ならず／調ひしと申べし／西 敦盛の笛とあれど其断なく又川  
に肌身／早小船 業の笛二所とも慥ならず東勝

(軍配印) 東 五十点

西 二十五点 (六十五才)

五日目三

南に高くまき登り

里丸

東 風雅に名だつ萩の土地 高臺／寺

から／／崎の笑顔

出多成

西 金澤才女はなに謎 准句 (六十五ウ)

東 高臺寺の萩調ひ候但し句の体によれば／玉川の宮城野の画力可  
なるべし／西 金沢の才女が山吹の謎も能いひなし給へり／尤わら  
ひ貌に花に謎少し薄きやうなれど聞え／ざるにもあらず東は帖中  
等類も多ければ／珍らしげ少し薄く西を勝とす

東 四十点

五日目四

土手の番する身ハ安し

茂寿

東 後世を觀する深山住 山の／庵

はしハ王子の家遠く

玉光

西 有馬湯治の冷を除 湯治 (六十六ウ)

東 山中の庵に閉籠りて悟道 觀念する体／尊き禪僧などなるべし  
誰と名をさし／玉ハねども本文よく叶ひ句体一挙あり／西 有馬  
の湯治に冷湿を除く義も調ひ候／東西申むねなき中に西は一わた  
りの句東は一節／ありて口合も勝れたれば東勝

(軍配印) 東 七十五点

西 三十点 (六十七才)

五日目五

滝の白玉涙の測に

商人

東 民も豊かさ秋田も無支に 豊年

牛のわらへの聲高く

玉光

西 月をなかめの野邊名立 むさし／野 (六十七ウ)

東 豊年の米作目出たく調ひ候へども白玉／ゆたかさ少し薄く句  
のとめも力なし／西 むさし野の月見調ひて申むねなし／依て西勝

東 三十点

(軍配印) 西 四十点 (六十八才)

五日目六

咲は散ならひといと憂ハ又

甲乙

東 神楽聞祓ひも伊勢の国山田 太々／神楽

南に高く巻のほり

スカ丸

西 僻<sup>(ヒカミ)</sup>にあらぬ形<sup>(ナリ)</sup>の鬼 嫁／おとし<sup>(六十八ウ)</sup>

東伊勢の太々神楽長き題を能言<sup>ヨク</sup>こなし／たまひ調ひ候／西嫁<sup>ヨメ</sup>おどし谷も聞え候へども僻<sup>ヒカミ</sup>にあらぬとの／詞心ゆかず是程僻<sup>ヒカミ</sup>し業はなきにあらぬ／とはいかゞの義にや僻<sup>ヒカミ</sup>に飭<sup>カサ</sup>るなどあらば可<sup>カ</sup>なるべし／此儘にては東勝

(軍配印) 東 三十五点

西 二十点 (六十九オ)

五日目七

南に高く巻<sup>(マキ)</sup>上<sup>(アホ)</sup>り

梅里

東 風雅<sup>(フヤ)</sup>に名たつ萩の土地 高臺／寺

泣しわらひし物語

閉口

西 浪路あやしき夜の明 不知／火<sup>(六十九ウ)</sup>

東高臺寺の萩聞え候へども前の三番目／にも同しの句ありいかゞの義にや不審／西筑紫<sup>(ツクシ)</sup>のしらぬ火夜の明<sup>(アカ)</sup>と斗にてはすこし／こたへざるやうなれと無理業<sup>(ムリワザ)</sup>にもあらず何分／東帖中同じ句あれば西を勝とす

東 四十点

五日目八

人目まはゆき笠の内

登龍

東 智慮<sup>(ハカ)</sup>て謀る火山の牛 よし仲／火牛

茂寿

西 日の出まさる地朝の不二 准句<sup>(七十ウ)</sup>

東 碓<sup>トナミ</sup>並山の火牛<sup>クワギウ</sup>大体調へども笠の内／山の牛申さばかけ合疎<sup>ウツ</sup>し／西富士山の朝日調ひて申むねなし依て／西を勝とす

東 四十点

(軍配印) 西 九十点 (七十一オ)

五日目九

定めなき社浮世のならひ

出多成

東 唐<sup>(タイ)</sup>て大功牛をそ放し 田單

泣しわらひし物語

我丈

西 浪路朝霧長閑なり 朝／景色<sup>(七十一ウ)</sup>

東 齊<sup>セイ</sup>の田單<sup>デンタン</sup>か籠城<sup>クワウ</sup>して火牛<sup>クワギウ</sup>を放し／寄兵<sup>ヨセテ</sup>を確<sup>クダ</sup>き大功<sup>カウ</sup>を立し義調ひ候／西海上の朝景色も安らかに言<sup>イヒ</sup>なし給ひ／申むねなし東西調ひし中に東一しほ句に／力あれば手弱<sup>テス</sup>き西を押<sup>オシ</sup>仆<sup>フツ</sup>して東勝

(軍配印) 東 七十点

西 五十点 (七十二オ)

五日目十

泣しわらひし物語

東 橋に上りし夜の天路 月／宮殿 スカ丸

さるにても我つま

商人

西 咲梅も（ガ）雅な庭 准句（七十二ウ）

東 唐の玄宗皇帝が道士の仙術にて／月宮殿へ昇しも調ひ候尤泣し  
橋に／少し甲斐なけれども聊の支なり／西庭の梅調ひ候へども  
題どりあしく尻切／題のごとし句は題どり勘要なりかやうの題ハ  
／労して功なし申迄もなく東勝

（軍配印）東 四十五点

西 二十五点（七十三オ）

五日目十巻

定めなき社浮世のならひ

登龍

東 ながめ在所の月夜の田並 更科 我文

西 眺め秋の野月夜の田並 全（七十三ウ）

東 西とも更科の田毎の月にて句造りも／大体相似たれども東在所  
のといひては句／狭くなりて思はしからず西秋の野とある方ハ／  
句体廣ければよし尤田毎の月は山の梯子田の／やうに聞ば野とい  
ふも如何なれども在所とあるより／可なるべし依て東をまけとす

東 三十五点

（軍配印）西 四十点（七十四オ）

五日目十二

（沉）湘日夜流れ去

東 名所木々は眺め春 准句 梅干

屯

西 連名一座ならべ書 戲場／看板（七十四ウ）

東 一わたり聞ゆながら名所はつまる音にて／名所と引音なければ  
かけ合甲斐なし／西 戲場の招き看板本文に能かけ合／申むねなし  
よつて西を勝とす

東 二十点

（軍配印）西 四十点（七十五オ）

五日目十三

（沉）湘日夜流れ去ル

哥仙

東 献上式や荒和布茹 早鞆／祭 里丸

西 反答詩には和哥で勝ツ 白樂／天（七十五ウ）

東 早鞆祭の荒和布一わたり調ひ候尤／やの字遊びて少し捩なし  
／西 白樂天漁翁の問答題に能乗て／申むねなく調ひ候西勝と申べし

東 四十点

（軍配印）西 七十五点（七十六オ）

五日目十四

（沉）湘日夜流去

甲乙

東 戦場力者鼎さす 伍子／胥

玉光

西 戰場智士か和歌て勝 細川／田邊／落城（七十六ウ）

五日目弓取の曠勝なれば行司も氣を／改めて東西の取方をつら  
く／見るに東は名にし／おふ楚国の御抱伍子胥と名うての大力西  
ハ羽／柴家大鼯鼠の細川と聞えし和哥の手取／互に立合良久しく  
見物のイキ息もだく付斗隙取／ともに呼吸を考へてやつと立合東  
は千斤の／鼎さし上て投付んとし西は倭哥の和らかに／受流し  
或は初五ことゞの首叩にし又はよミ哥の／腰折にせんとあやど  
りもミ合／勝負さらに（七十七オ）付がたければちよつと息繼  
のぱつとハ水を／入また膝を組合してしばらく勝負を見るに／元  
来伍子胥か鼎は国々の王と參會の／宝くらべの折の支にて軍場  
にはあらず／されば東戰場といふ詞体落たればさしも大力の伍子  
胥も詩を書筆の腕ふるひ／細川が哥かく手先に押出されて西勝

東 二五点

（軍配印）西 四十点（七十七ウ）

〈端歌／四ツの曲〉十句点控／六百十点 我丈／五百四十点 出  
多成／五百三十点 茂寿／五百廿五点 閉口／五百五点 寿加丸  
／四百六十五点 里丸／（以下下段）四百五十、〈山笑改／  
屯〉／四百三十、登龍／四百十五、歌丸／四百三、甲乙／  
四百、玉光／三百六十五、商人／三百十、梅里／二百廿  
五、梅干（七十八オ）（七十八ウ）八十一ウ空白

（なかじまほか 東洋大学附属牛久高等学校特別専任教諭）